



現代医学も認める、血液を浄化しガンを癒す方法

食べ過ぎず、少食にすること

一度ガンになってしまうと予防的方法はかえりみられず、手術や放射線、化学療法などの治療後は「体力をつける為に」という大義名分のもとに、肉食を奨励し、うんと食べることを勧める医師がいるのですから、驚きです。本来、予防法と治療法は一体となるべきものだからです。「がん予防・治療法」は、一言でいえば、「血液を汚さない方法」「血液を浄化する方法」と考えて良いでしょう。1935年、マッケイ博士は「低栄養が動物の寿命を延ばし、腫瘍の発生を抑える」ことを証明しています。

米国ガン協会は標準体重より20%重いと1.05倍、40%重いと1.25倍ガンになりやすいと発表しています。また肥満の人は、がん細胞をやっつけるTリンパ球やマクロファージの機能が弱いことも分かっています。このように食べ過ぎがガンの発生を促し、少食がガンを少なくすることは証明されています。さらにガンになってからも高栄養を与えると、ガンが悪化することが明らかになっています。

がん患者の食欲不振は「血液中にそれ以上の老廃物を作るのを止め、つまり血液の汚れがそれ以上にならないようにする自然治癒力の表れ」ではないでしょうか。ガン末期患者に高栄養・高カロリーの点滴をするのも考え物です。点滴によって体内が水浸しになります。心臓や腎臓の機能が低下しているがん患者は、全身のむくみが出ます。特に、肺にむくみ(肺水腫)が生じますと、痰や咳がやたらと出て体力を落としますし、体内の余分な水分は心不全の引き金になる為、動機・息切れが強くなり、いかにも苦しそうです。

少食は、血液内に余分な汚れを作りませんし、ガン腫という血液の浄化装置も必要ないのです。現代のように、ろくに働きもしないのに、また、さして空腹でもないのに、時間がきたからと言って朝・昼・夕の食事を摂ると、体としては過剰の栄養をどう処理してよいかわからず、結局は、ガン、痛風、糖尿病、動脈硬化、血栓症、(脳梗塞、心筋梗塞)、結石・・・など、さまざまな栄養過剰病を作ってくるのです。巷には「朝食は一日の活動源になる一番大切な食事だから、しっかり食べないとイケない」などという、まことしやかな「学説」が流布されていますが、これは大いに疑問です。朝食を英語でbreakfastと言いますが、これは止める(break)と断食する(fast)の合成語で、前日の夕食後、何も食べずにいた状態(断食)をやめて、摂る食事だという意味です。

十分に唾液が出るまでよく噛む

よく噛みますと、早食いする時に食べ過ぎてしまうようなことがなくなり、自ずと少食を守れます。脳の満腹中枢が正しく機能してくれるからです。十分に噛むと唾液がよく出ますし、唾液腺から不老長寿のホルモンと言われるパロチンが血中に放出されます。また、唾液中には、10種類以上の酵素が含まれているとされますが、その中のペルオキシダーゼは、種々の発がん物質の解毒や、発がんの元凶と目されている活性酸素を除去する作用があります。

食物繊維を十分に摂取する

1日の便排出量を見ると、イギリス人はたったの100g程度、アフリカ村民はなんと500g近くも出しているのです。「不消化物を多く食べ、それだけ排泄する便が多く、また便の滞留時間も短いアフリカ人に対して、精白したパンや砂糖など、いわば低繊維食を食べているイギリス人は便も少なく、滞留時間も長く、それだけ発がん物質が腸内粘膜に接する時間が長くなり、大腸がんの原因になる」のです。食物繊維の研究は医学・栄養学の分野での花形となり、やがてたんぱく質、脂肪、炭水化物、ビタミン、ミネラルに次ぐ「第六の栄養素」、または「非栄養の栄養素」という地位が与えられたのです(食物繊維の多い食べ物は、海藻、豆類、野菜、コンニャク、玄米・・・などです)。

食物繊維は

- ①発がん物質の除去作用・・・腸内で発がん物質をうすめたり、便としての排泄を促してくれる。
- ②解毒作用・・・有毒物、カドミウム、水銀などの有毒重金属が腸から吸収されるのを阻止する。
- ③コレステロール・脂肪の腸から血液への吸収を妨げる。
- ④糖分の吸収を抑制する
- ⑤脱腸、痔核、潰瘍性大腸炎、クローン病、大腸がんなどの予防をする。
- ⑥有益な腸内細菌を育てる

ビフィズス菌や乳酸菌などの有用菌を育て、腸内でのビタミン合成、免疫物質の産生を促し、ビフィズス菌が腸内にたくさん増殖すると、腸内が酸性になり、胆汁酸が二次胆汁酸になるのを防ぐ。つまり、大腸がんの予防になるのです。